



いろは丸事件と靱・坂本龍馬

園尾, 裕

(Citation)

海事博物館研究年報, 38:23-27

(Issue Date)

2010-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81005603>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005603>



いろは丸事件と靱・坂本龍馬

福山市靱の浦歴史民俗資料館 学芸員 園 尾 裕

講演要旨

福山市の「靱の浦」は、瀬戸内海のほぼ中央に位置し古代より海上交通の要衝であった。潮待ち、風待ちの要港として必ず帆船は入港し、「物資」と「人」の交易が盛んに交流し、その結果として文化も拓け、大層賑やかな港町であった。また、江戸時代には朝鮮通信使や琉球人の「江戸上り」の一行も立ち寄り、それらを物語る史料も遺されている。

幕末には坂本龍馬の率いる海援隊らが乗った蒸気船「いろは丸」が、紀州藩の「明光丸」と讃岐箱ノ岬沖で衝突し、曳航中ほどなくして沈没した。そして、備後靱の津に上陸し事件の談判を行うこととなった。これが我国で最初の蒸気船同士

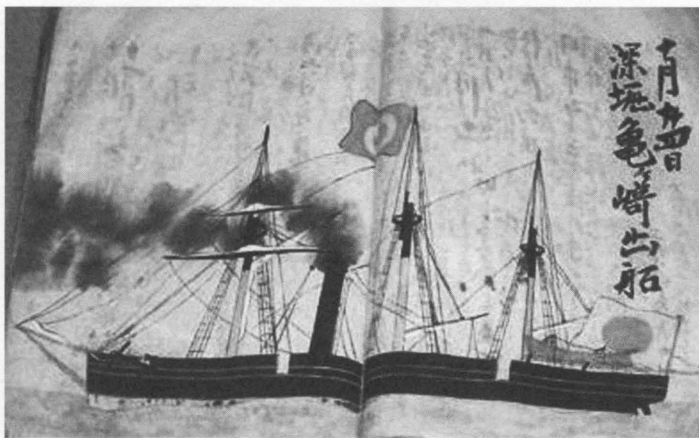
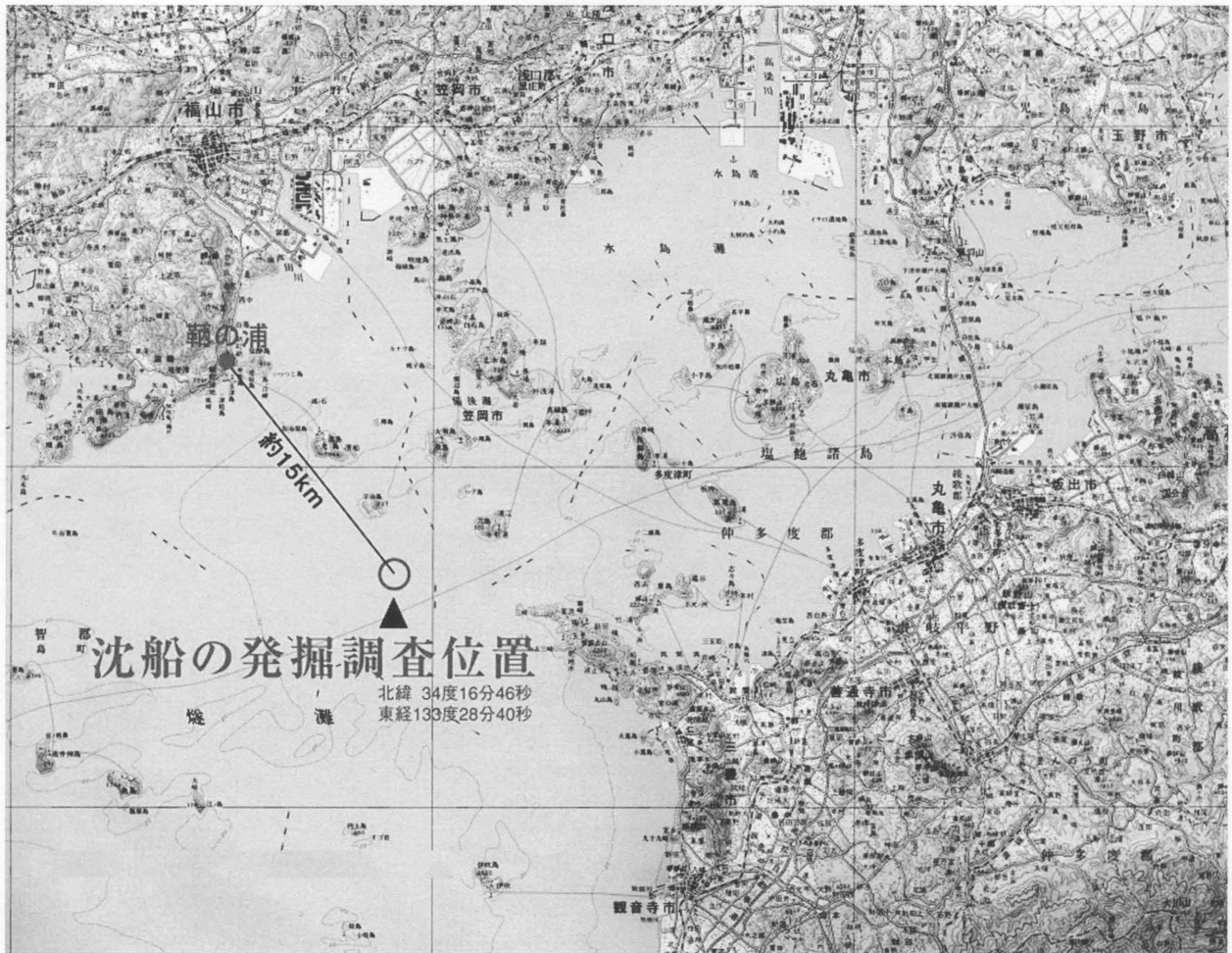
の海難事故をめぐる談判となったのである。談判は靱だけでは決着がつかず、長崎に持ち込まれた。龍馬は、紀州藩を相手に83,500両ほどの賠償金を支払わせることに成功した。しかし、賠償金はその後13,000両余減額して70,000両で決着したのであるが、支払われたのは龍馬が暗殺された後だった。

いろは丸の造船から大洲藩がその船を購入するまでの経過を従来言われていた説と、最近大洲藩主加藤家に保存されていた「いろは丸購入契約書」の解析から判った新事実を交えて紹介した。龍馬の手紙や靱の浦歴史民俗資料館での展示などあれこれとお話させていただいた。詳細は、当日配布した講演レジュメを参考にしていきたい。

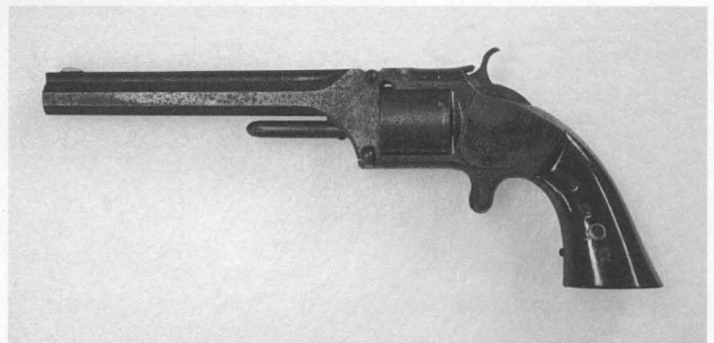
いろは丸事件略年表

西 暦	元 号	月 日	事 項	
			従 来 の 説	新 事 実
1862	文久 2		イギリスのグリーンロックで造船鉄鋼船、蒸気内車（スクリュウ船）45馬力 長さ30間 幅3間 160トン サーラ号	スコットランドのグリーンロックで造船全長213,441パルム（1パルムは22cmとして約47m）全幅23,638パルム（約5.2m）深さ13,442パルム（約3m）積載量209.16トン 無衝角、円形船尾母港マカオ アヴィゾ号
1863	文久 3		オランダ人商人ボードインから薩摩藩が75,000ドルで購入 安行丸	薩摩藩がイギリス人商人グラバーから購入 安行丸
1865	慶応 元		薩摩藩が大型船購入にあたりオランダ人商人ボードインに売却	薩摩藩の五代才助がマカオ生れのポルトガル人ロウレイロ（デント商会）に売却 ※【慶応2年正月】
1866	慶応 2	6月22日	薩摩藩の五代才助の世話で大洲藩の国島六佐衛門紹徳が、オランダ人商人ボードインから70,000ドル（42,500両）で購入 いろは丸	薩摩藩の五代才助の世話で大洲藩の国島六佐衛門紹徳（大洲公代理人）が、在長崎ポルトガル領事のジョゼ・ダ・シルヴァ・ロウレイロから4万メキシコ・パタカ（約1万両）で購入 イロハマンス
		12月16日	大洲藩士の友松弘蔵、幕府（長崎奉行）に「いろは丸」を城下の町人対馬屋定兵衛の購入船として届け出る	
		12月24日	大洲藩の郡中奉行国島六佐衛門紹徳切腹する	

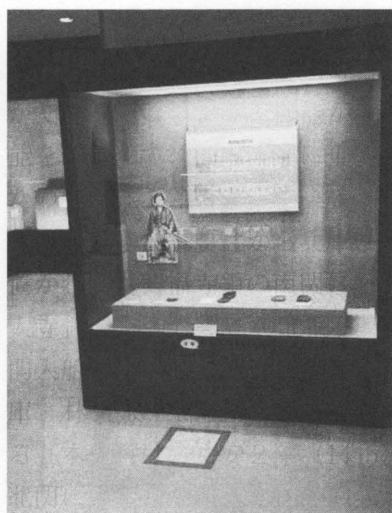
1867	慶応3	4月8日	いろは丸長崎に入港する
		4月23日	午後11時頃（紀州側の記録では6時30分頃）、讃岐箱ノ岬と備中六島の間を東航中、紀州藩船「明光丸」（878トン、150馬力）と衝突。曳航中ほどなくして沈没する（いろは丸事件）
		4月24日	午前8時頃、いろは丸の乗員34名を乗せた明光丸が鞆の浦に上陸。紀州藩は円福寺へ、いろは丸側は小曾根英四郎の仲介で榊屋清右衛門宅を宿とし、道越町の魚屋萬蔵宅を応接（談判）所として、午後1時頃より始める
		4月25日	龍馬は、急場の要用として一万両を要求するも、高柳楠之助は勘定奉行の茂田一次郎と相談の上、金一封（1,000両）を出す返答を拒否する
		4月27日	午後2時40分、交渉決裂。交渉の場を長崎に移す。明光丸が鞆港を出航する。龍馬、別船にて鞆港を出航する
		4月29日	明光丸が長崎港へ入港。龍馬、伊藤助太夫宅に入る
		5月8日	龍馬、三吉慎蔵へ妻榊崎龍のことを託し、下関を出航する
		5月10日	坂本龍馬、長崎へ到着
		5月13日	海援隊士たち、長崎へ到着。龍馬、橋本麒之助を伴って高柳楠之助の宿を訪れる
		5月15日	【長岡謙吉の応接筆記】才谷梅太郎から高柳楠之助宛に長岡謙吉に筆記させた内容を文書で30項目を確認させ、今後は「万国公法」に則って議論することを約束させる
		5月16日	【成瀬国助の応接筆記】 出席者 ○土佐藩 才谷梅太郎ほか二名 ●紀州藩 高柳楠之助ほか二名 実質、才谷梅太郎と高柳楠之助の両者の応接昨日の応接記録を二か条を英文に翻訳して万国公法にて判断すべきとする龍馬と、幕府（長崎奉行所）の公裁を仰ぐべきとする高柳の主張が対立する
		5月22日	【聖徳寺にて後藤象二郎と茂田一次郎との応接】五代才助を調停に入れ、政治的交渉の見事さにより土佐藩側が賠償に応じさせる 〔証書内容〕 賠償金額 83,526両198文 内 35,630両イロハ丸沈没ニ付キ船代 47,896両198文 積荷物等代価
		5月26日	龍馬、高柳楠之助と面談し、後藤象二郎と共に紀州藩の茂田一次郎を訪れる。長崎で流行らせた俗謡「船を沈めたその償いは、金をとらずに国をとる」の効果が絶大となる
		5月28日	紀州藩、五代才助に調停を依頼する。紀州藩士の岡本覚十郎、高柳楠之助と共に龍馬襲撃のため僚喰町の宿を訪ねるも不在で断念する。龍馬、伊藤助太夫に長崎での世論が海援隊に有利であることをまた、妻龍子あてに近況報告と下関に立ち寄れないことの詫びを手紙に記す
		5月29日	龍馬、いろは丸事件の賠償額について調査不十分を理由に仲介役の五代才助への対応を保留する。小谷耕蔵・渡辺剛八らにいろは丸事件の交渉成立を手紙で知らせる
		10月19日	龍馬の代理として、中島作太郎（信行）が長崎に下り紀州藩の山田伝左衛門と会談し、賠償金を13,000両余減額して70,000両で事を終わりにする和解が成立する
		11月7日	紀州から土佐藩へ賠償金が完済される
		11月15日	坂本龍馬、京都近江屋にて暗殺される
		12月30日	佐々木三四郎（高行）、賠償金のうち15,345両余を海援隊一同に分配する。大洲藩へ船価・海援隊貸し金の合計42,500両が返還される



いろは丸姿図 【白帆注進外国船出入注進】より



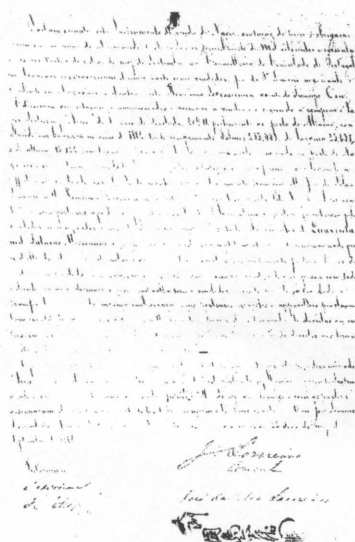
龍馬が所持していたものと同型のスミス&ウエッソン2型



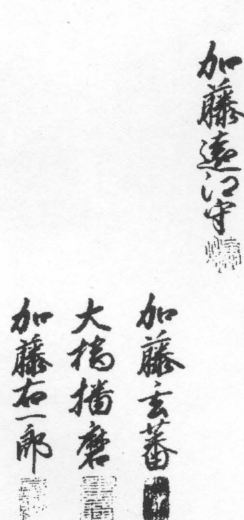
展示風景



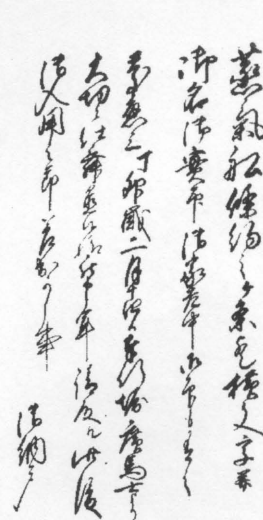
福山市鞆の浦歴史民俗資料館「龍馬からの贈り物」展



約定文書



藩主・家老の書名



契約書の外包み



愛媛龍馬会建碑の国島六左衛門墓碑



国島六左衛門の墓正面



左面 慶応2年12月24日 38歳

大洲市の浄土宗「壽永寺」境内にある国島六左衛門の墓

坂本龍馬の手紙

妻お龍あて

慶應3年(1867)5月28日

京都国立博物館所蔵

其後ハ定而御きづかい察入候。
しかば先ごろうち、たびく
紀州の奉行、又船將などに
引合いたし候所、なにぶん女の
い、ぬけのよふなことにて、度々
論じ候所、此頃ハ病氣なりとて
あわぬよふなりており候得とも、後
藤庄次郎と兩人にて紀州の
奉行へ出かけ、十分にやり
つけ候より、段々義論がは
じまり、昨夜今井・中島・
小田小太郎など参り、やかましく
やり付候て、夜九ツすぎにかへ
り申候。昨日の朝ハ私しが
紀州の船將に出合、十分
論じ、又後藤庄次郎が
紀州の奉行に行、やか
ましくやり付しにより、
もふく紀州も今朝ハ
たまらんことになり候もの
と相見へ、薩州へたのみ二
行て、どふでもしてこと
わりおしてくれよとのこと

其後ハ定而御きづかい察入候。
しかば先ごろうち、たびく
紀州の奉行、又船將などに
引合いたし候所、なにぶん女の
い、ぬけのよふなことにて、度々
論じ候所、此頃ハ病氣なりとて
あわぬよふなりており候得とも、後
藤庄次郎と兩人にて紀州の
奉行へ出かけ、十分にやり
つけ候より、段々義論がは
じまり、昨夜今井・中島・
小田小太郎など参り、やかましく
やり付候て、夜九ツすぎにかへ
り申候。昨日の朝ハ私しが
紀州の船將に出合、十分
論じ、又後藤庄次郎が
紀州の奉行に行、やか
ましくやり付しにより、
もふく紀州も今朝ハ
たまらんことになり候もの
と相見へ、薩州へたのみ二
行て、どふでもしてこと
わりおしてくれよとのこと

のうハ薩州よりわ彼
イロハ丸の船代、又その荷
物の代お、佛、候得バ、
ゆるして御つかハし被成
度と申候間、私よりハ
そハわ夫でよろしけれども、
土佐の士お頼の港に
すておきて長崎へ出候
ことハ中へすみ不申、
このことハ紀州より
主人土佐守へ御あいさ
つかわされたしなど
申ており候。此ことわ
またうちこわれてひと
ゆくさ致候ても、後藤
庄次郎とともにやり、
つまりハ土佐の軍艦
もつてやり付候あいだ、
けして御安心被成度候。
先ハ、早々かしこ
五月廿八日夕
龍

のよし。薩州よりわ彼
イロハ丸の船代、又その荷
物の代お、佛、候得バ、
ゆるして御つかハし被成
度と申候間、私よりハ
そハわ夫でよろしけれども、
土佐の士お頼の港に
すておきて長崎へ出候
ことハ中へすみ不申、
このことハ紀州より
主人土佐守へ御あいさ
つかわされたしなど
申ており候。此ことわ
またうちこわれてひと
ゆくさ致候ても、後藤
庄次郎とともにやり、
つまりハ土佐の軍艦
もつてやり付候あいだ、
けして御安心被成度候。
先ハ、早々かしこ
五月廿八日夕
龍